



皿山の今・昔

～これが国道33号 70年前の赤絵町～

この写真に添えられた表題は「大正拾貳年有田町品評会 庄健商店店頭ニテ」です。品評会協賛事業として大正4年から陶器市が始まりますが、これは赤絵町付近の陶器市の様子を写したものだと思われます。当時この道は国道33号ですが、拡幅前ですから道幅も2～3メートル位で車力が行き交うのがやっとという状態です。店頭には大皿や火鉢などが並べてあります。

旗は「品評会」と「有田焼 大売出し」の二種類が立っていますが、軒先には万国旗もはためいています。現在のように盛んな様子は伺えませんが、陶器市の産声のようなものを感じさせる一枚です。

当館ではこのような有田の歴史を物語る写真を集めています。これぞ有田・またはわが家の一枚と思われる写真がありましたら、是非ご一報ください。

写真提供

泉山 鶴田周之助 様



現在の赤絵町

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報

No.34

しゅん かん も 筍 干 盛 り

5月といえば有田の町は陶器市一色となります。明治29年の陶磁器品評会から発展し、大正4年から等外品の蔵さらえ大売出しを陶器市の始まりとしています。近年は初夏を告げる全国的な行事として名を広めています。

この陶器市の期間中、5月5日は端午の節句で男児の健やかな成長を願う行事があります。現在、初節句を迎える男児の家庭ではのぼりいヤー（幟祝い）といって祝宴を催し、親戚や縁故者は武者人形や、鯉のぼり、武者のぼりなどを贈って祝います。

この端午の節句はその起源を遡ると「印字打ち」という中世の風習に端を発しているといわれています。これは多人数が二手に分かれつづてを投げ合って争う一種の石合戦で、因地とも書きます。正月と五月の行事で、時として激しい闘争となり度々禁止されながらもその風習は後世まで残りました。近世初期の『月次風俗図』には5月の画題にみられ、端午の節句行事として子供が集まって小石を投げ合いまた切り合いの合戦の真似をするという尚武的遊戯となりましたが、これも危険を伴うというので禁止され、延享（1740年代）のころから後は菖蒲の音が尚武に通じることもあって、端午の菖蒲刀を弄ぶ菖蒲切に変わったといわれています。

近年有田では陶器市が盛んになるにつれ、その最終日と重なるために作る家庭が少なくなってきましたが、この端午の節句料理の一つに「筍干盛り」というものがあります。

作り方は次の通りです。

- ① ゆでた筍を切らずにそのまま皿の中央に立てる
- ② ぜんまい・ふき・ごぼう・にんじん・しいたけ 昆布などの旬の山菜や乾物などをだし汁、醤油みりんなどで味付けをし、①の回りに適当に並べる。（家庭によっては②の材料を「兵隊さん」といって並べていたという）
このほか、卵やかまぼこなども並べる。
- ③ 中央の筍に梅の実のついた枝や山椒の枝を差し飾る。



筍干盛り

これらの作り方や盛り方は各家庭で少しずつ異なりますが、以前は必ずゆでた伊勢海老を中央に這わせたり、あわびや鯛を並べて豪華さを際立たせたといわれますが、現在は省略することもあるようです。

筍干の名の由来は「筍を切って、あわび・小鳥・かまぼこなどと色よく煮含めて盛り合わせた譜茶料理（日本国語大辞典）」からきているものと思われ、各地に平皿にもってつける精進料理の名（彦岐）や、煮しめなどを盛る陶製の深い容器（鹿児島）に筍干の名をみることができます。県内では宋から茶の種をもたらしたとされる栄西禅師を崇敬する背振山の人々の料理の中で、お盆料理を盛る大皿のことを「しゅんかん皿」と呼んでいます。譜茶料理から発達した有田の「筍干盛り」は、元来跡継ぎとなる男の子を大事にする気風の中で、有田独特の料理として豪華なものになっていったものだと思います。

家によっては初節句を迎えた男児には親筍干といって大皿に盛り、他の子には子筍干といって小さな皿に盛る所もありましたし、初節句に限らずに毎年男の子の健やかな成長を願って作る家庭もありました。筍に飾る植物も菖蒲と一緒に立てる家もありました。

この菖蒲の葉を使って6日には菖蒲湯を沸かし、浴槽の中に葉を入れこれを頭に巻くと「頭が良くなる」とか「元気に育つ」などということが言い伝えとして残っています。

向ノ原窯

— 1994年の発掘調査 —

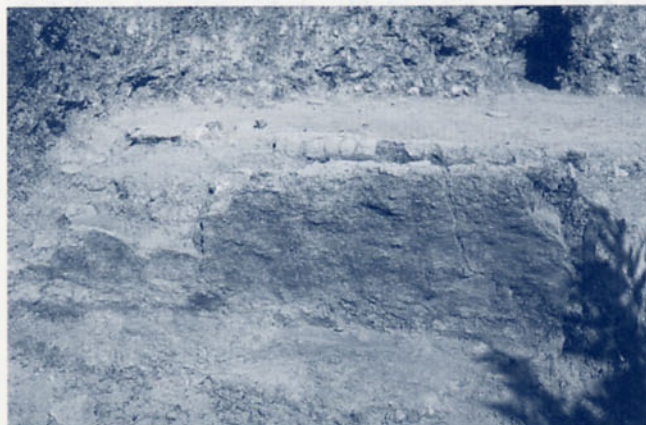
戸杓地区には、現在3ヶ所の古窯跡が確認されています。一本松窯と禅門谷窯、そして、向ノ原窯の3ヶ所です。

一本松窯と禅門谷窯については1989年に発掘調査を行っています。向ノ原窯では3基の登り窯が見つっていますが、その中の1・2号窯と名付けられた登り窯は1990年に調査を行っています。そして、1994年に残る3号窯の調査を行いました。この調査で戸杓地区で確認されている全ての登り窯を部分的ではありますが、一通り調査したことになります。その結果、戸杓地区の窯場は17世紀初めに始まり、17世紀中頃にはその歴史を閉じていたと推測されます。

I. 遺構

窯跡の発掘調査の場合、まず登り窯を見つけだすところから始めることが多いのですが、3号窯は地表に窯の壁が顔を覗かせており、見つける手間が省けました。3号窯は1・2号窯と胴木間（登り窯の焚き起しの部分）を寄せ合うように築かれていました。そして、地表に現れている壁を中心に掘り進めると、火床（燃料を燃やす部分）・火床境（火床と砂床の境）・砂床（製品を置く部分）などが現れました。火床・砂床は一度築き直されているようです。

また、製品の失敗品などを捨てた物原については調査することができませんでした。物原は宅地造成のために削られて、消滅してしまっているようです。



検出された登り窯の焼成室
床の上には製品や窯道具が少し残されていました。



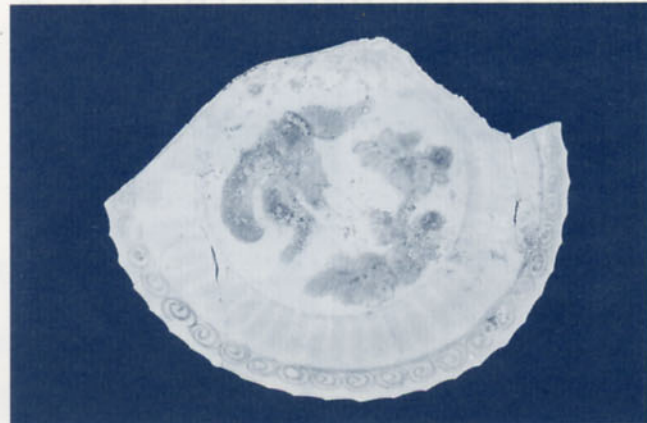
調査前の状況
窯の奥壁が地表に露出していました。

II. 遺物

出土した製品のほとんどは磁器であり、中でも染付小皿が大半を占めています。こうした特徴は同じ戸杓地区の一本松窯と同じで、両者の製品はよく似ています。

また、製品の中には「蛇の目高台」とよばれる畳付の幅が広い高台をもったものも多く見られます。蛇の目高台の原形は同じ頃の明代の中国磁器に見られます。しかし、細かく見ると全く同じではないようです。中国磁器の蛇の目高台の製品の多くは、高台内には釉が掛けられていませんが、有田の蛇の目高台の製品は高台の中にも釉がかけられているものがほとんどです。向ノ原窯で出土した蛇の目高台の製品も全て高台の中に釉がかけられていました。有田焼は江戸時代を通して、中国磁器の影響を受けていますが、完全にコピーするのではなく、有田流にアレンジすることが多かったようです。

そして、蛇の目高台は1640年代を中心に流行しますが、次の時代にはすたれてしまいます。長く続くスタイルもあれば、すぐ消えてしまうスタイルもあることは今と全く変わりません。



窯から出土した製品
染付小皿を中心に生産した窯だったようです。

焼物づくり 今昔

染付有田皿山職人尽し絵図大皿

染付有田皿山職人尽し絵図大皿には、江戸時代の焼物づくりの過程が描かれています。前回の釉薬かけに引き続き、今回は焼き物作りを支えた仕事を追ってみます。

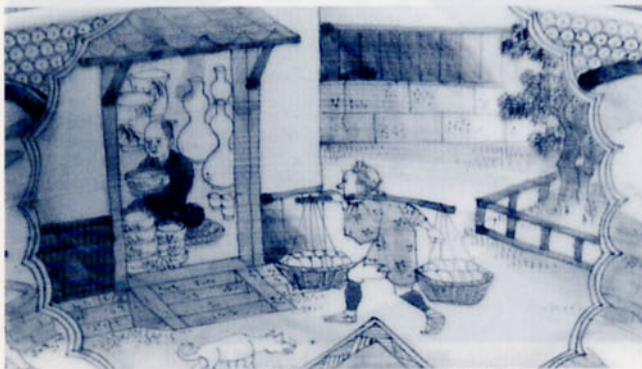
8. 荒仕子 (あらしこ)

近年まで皿山では「荒仕子」または「荒使子」という呼び方が残っていて、窯業の中で重要な役割を担っていました。もともとこの語にはある種の労役奉仕の意味があり、荒仕事の意味ともいわれています。戦国時代の頃より「歩(かち)・あらしこ」とか、「中間・小者・あらしこ・人夫」などと表現され、小者・人夫のなかに入られています。

この『有田皿山職人尽し絵図大皿』の中では37人の登場人物がありますが、検品・保管の場面に焼き上がった製品を蔵の中へ運んでいる人が荒仕子と思われます。また、製土工程の作業の中でオロの側で作業をしている人なども荒仕子でしょう。

このように窯場の雑役に従事する人を荒仕子といいました。皿山の中で絵書きや細工人などの職人は就業の場所について大きな制約を受け、雇い主である窯焼きの屋敷以外で仕事をする事は禁止されていました。これは荒仕子も同様で、皿山会所は年中雇い(年間契約)や半年以上の雇用契約の場合は請け状(身元保証書)を確認して契約するように命じていました。

また、『皿山代官旧記覚書』の寛政3年(1791)達帳の中に「荒仕子・下人、皿山一手限りにて相抱候様仰せ付けられ候条、他所より召し抱え置き候者は早速ひまを差し出し候様然るべく候」とあり、皿山以外の荒仕子を締め出しています。



染付有田皿山職人尽し絵図大皿

お知らせ

◇寄贈資料紹介◇

- ◆磁器爆弾(1点) 小城郡牛津町 古川 敏郎様
- ◆書籍(22点) 埼玉県大宮市 松本庄一郎様
- ◆道中車など(5点) 有田町 岩尾 熙様
- ◆鬼瓦など(6点) 有田町 樋口 正己様

ありがとうございました。

人事往来

前任

館長 井手誠二郎

学芸員 青野 千舟

3月31日退職

新任

館長 森田 一雄

学芸員 尾崎 葉子

4月1日就任

よろしく願いいたします。



続 濃み筆のつぶやき

7年間のブランクを経、思いもかけない人生の展開でまた有田町へ戻ってまいりました。この間、変わってしまったもの、変わらないものさまざまですが、「つぶやき」が「ほやき」にならないよう出来るだけの努力(この言葉も死語になりつつありますが)をして、子供たちの未来の基礎となる有田の歴史を学んでいきたいと思ひます。これからもどうぞよろしく願いいたします。(葉)

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報 No.34

発行年月日*平成9年6月1日

編集・発行*有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町泉山一丁目4-1

☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185